

氏名(本籍地)	後藤英樹(静岡県)		
学位の種類	博士(文学)		
報告・学位記番号	甲第426号(甲(文)第50号)		
学位記授与の日付	平成30年3月25日		
学位記授与の要件	本学学位規程第3条第1項該当		
学位論文題目	キェルケゴールの建德的著作の思想 —構造と展開—		
論文審査委員	主査 教授	博士(文学)	中里 巧
	副査 教授	博士(学術)	河本 英夫
	副査 教授		相楽 勉

【論文審査】

後藤英樹氏による博士学位(甲)請求論文「キェルケゴールの建德的著作の思想 —構造と展開—」の規模は、400字詰め原稿用紙に換算すると650枚相当(26万字相当)であり、量としては十分に条件を満たしていると判断する。後藤英樹君は、2010年3月に明治大学大学院理工学研究科基礎理工学専攻数学系博士後期課程退学後、それまで学んだ基礎数学の見識を踏まえつつ、キェルケゴール宗教思想を学ぶために、2010年4月東洋大学大学院文学研究科哲学専攻博士前期課程に入学後、一貫して中里巧を研究指導主査として、2012年キェルケゴール研究による本学博士前期課程修了をへて、2012年本学博士後期課程入学後現在にいたるまで、キェルケゴール研究に力を注いできた。

本学位請求論文は、後藤英樹氏の数学的素養を生かしながら、キェルケゴール宗教思想におけるレトリックの構造・価値・意義などをきわめて詳細かつ大規模に、分析解明したものであるが、従来、我が国においても欧米においても、キェルケゴール思想におけるレトリックの構造分析については断片的にしか考察されたことがなく、本学位請求論文におけるレトリックの構造分析は、キェルケゴール研究史上きわめてユニークかつ有意義なものとなっている。

1. 論文の目次

本学位請求論文の目次は、以下のとおりである。レトリック構造分析の仔細を、端的かつ矛盾なく報告する必要があるため、簡略化せずそのまま以下に掲げる。

凡例

序論 レトリックとしての建徳的講話

第一章 『二つの建徳的講話』(1843年)

第一節 信仰の期待 — 「三」、「四」の構造—

第一項 願いと信仰

第二項 「四」の構造

第三項 信仰の期待について

第四項 信仰は勝利を期待する

第二節 あらゆる善き賜物とあらゆる完全な賜物は上からやってくる (一)

第一項 「六」の構造

第二項 神の愛と人間の愛

第二章 『三つの建徳的講話』(1843年)

第一節 愛は多くの罪をおおう (一) —愛と罪：「三」、「五」、「七」の構造—

第二節 愛は多くの罪をおおう (二) —愛の業：対と「三」の構造—

第三節 内なる人を強くする — 「三」の構造—

第一項 証言

第二項 内なる人

第三項 古代預言者の特質

第三章 『四つの建徳的講話』(1843年)

第一節 主は与え、主は取り去り給う、主の御名はほむべきかな

第一項 「三」の構造

第二項 ヨブの言葉

第二節 あらゆる善き賜物、あらゆる完全な賜物は上からやってくる (二)

第一項 知識と疑い — 「六」と「三」の構造—

第二項 聞くに早く、怒るに遅く、素直に受け入れる

第三節 あらゆる善き賜物、あらゆる完全な賜物は上からやってくる (三)

第一項 神の平等 — 「三」の構造—

第二項 与えることをなしうる人

第三項 受け取ることをするしかない人

第四節 忍耐においておのれの魂をかち得ること

第一項 忍耐と魂 — 「八」の構造—

第二項 魂の再帰性

第三項 魂と世界 — 「三」の構造—

第四項 忍耐のための忍耐

第五項 魂と認識 — 「四」の構造—

第四章 『二つの建徳的講話』(1844年)

第一節 忍耐によっておのれの魂を保持すること

第一項 「七」の構造

第二項 忍耐と熟慮

第三項 忍耐と決意

第四項 忍耐と多様性

第五項 焦燥

第二節 期待における忍耐 — 「三」、「四」、「六」の構造—

第一項 時間的なものの期待と永遠なものの期待

第二項 期待における祈りと断食

第五章 『三つの建徳的講話』(1844年)

第一節 あなたの若い日にあなたの造り主を覚えよ — 「三」、「四」、「六」の構造—

第一項 客観的真理と主観的真理

第二項 若い日の追憶

第二節 永遠の至福の期待 — 「四」、「五」、「七」の構造—

第一項 天の至福

第二項 永遠な至福の期待

第三項 有限性と気遣い

第三節 彼は必ず栄え、わたしは衰える — 対、「四」、「六」、「九」の構造— 107

第一項 謙虚に自己否定すること

第二項 洗礼者ヨハネの姿 — 「四」の構造—

第六章 『四つの建徳的講話』(1844年)

第一節 神を必要とすることは、人間の最高の完全性である

第一項 僅かなものに満足すること — 対、「三」、「六」の構造—

第二項 神の恵み — 「三」の構造—

第三項 無に等しいものになること — 対と「四」の構造—

第四項 第一の自己の深化 — 対、「三」、「四」の構造—

第五項 第二の自己 — 対、「四」の構造—

第二節 肉中の刺 — 「五」の構造—

第一項 肉中の刺

第二項 第三天

第三項 宗教性 A

第四項 宗教性 B

第三節 臆病にならないように — 「三」、「四」、「五」の構造—

第一項 臆病と誇り

第二項 臆病と決断

第三項 決断はすべてを要求する

第四項 臆病と告白

第四節 正しく祈る人は祈りのなかで争い、勝利を得る — 「三」、「四」の構造—

第一項 祈りと争い

第二項 反復

第七章 構造と展開

第一節 ロマン派の影響 — 詩人バイロンとの関係について—

第一項 呪われし血

第二項 弁証法

第二節 『十八箇の建德的講話』の構造

第三節 キェルケゴールの信仰理解

第一項 「病」としての絶望と「死」としての絶望

第二項 罪と信念

第三項 絶望と信仰

第四節 知の極限と愛の強度

第一項 知の極限

第二項 愛の強度

結論 建德的講話の音楽的効果

註

参考文献一覧

2. 論文の概要

以下、本学位請求論文の概要を示す。

凡例： 聖書原文と翻訳については、ヘブライ語・ギリシア語およびカトリックとプロテスタント双方の邦訳を参照している。また、キェルケゴール宗教思想を研究するうえで、キェルケゴール全集第2版とキェルケゴール遺稿集第2版（共にデンマーク語原典）を底本として参照し、さらに、本学位請求論文の主題であるキェルケゴールの「建德的著作」については、邦訳である飯島宗享編『キェルケゴールの講話・遺稿集』（新地書房）を逐次参照参考して用いている。なお本学位請求論文全体の構成は、序論においてレトリック構造分析の意義、第一章から第六章において個々の建德的著作のレトリック分析、第七章において『十八箇の建德的講話』全体のレトリック構造の総括、結論においてレトリックに

おける音楽的効果が、論じられている。第一章から第六章までのそれぞれの節数は、建徳的講話の講話数に合わせており、ケルケゴールがそれぞれの講話において取り上げている聖書の聖句を、各節の主題にし、さらに主として各項において概念とレトリックの関係を分析している。

序論「レトリックとしての建徳的講話」： 本学位請求論文が、建徳的講話とりわけ『二つの建徳的講話』（1843年）から『四つの建徳的講話』（1844年）にいたるまで連続してケルケゴール自身によって公刊された一群の『十八箇の建徳的講話』を研究対象とする経緯として、ケルケゴール宗教思想とその生涯の出来事および『十八箇の建徳的講話』におけるレトリックと思想内容との有機的連関に着目することの重要性について述べている。なお、den opbyggelige Tale というケルケゴール自身による表現は、教化的講話ないしは建徳的講話と邦訳されてきたが、18-19世紀デンマークやノルウェーにおいてキリスト教敬虔主義が一定の勢力を持ち、こうした敬虔主義を背景としてルター派国教会牧師職にない者やその資格をそもそも持たない者また牧師であっても、礼拝等における公的説教ではない私的会合などにおいては、教化的講話ないし建徳的講話と称して説教の体裁を取った話がなされることが少なくなかった。

第一章『二つの建徳的講話』（1843年）第一節・第二節： ケルケゴールはしばしば講話の冒頭において、読者が実際に声に出して音読することを要求している。この要求は、各講話が複雑な韻を踏む仕方では記述されているからであり、そうした韻に従って読み進めることによって、思想的核心をそれぞれの読者が気づくように仕組まれているためである。各講話の文体は散文形式であり19世紀中頃の話し言葉の体裁であるが、そのなかに巧妙に複雑な韻が仕込まれており、その基本は数である。数は、聖書の章節数・言葉の数・類似する意味の数・講話の節数など、様々なバリエーションをもっており、あたかも交響曲のように、決まった数を基本とする韻が多重に織りなされて文章化されている。『二つの建徳的講話』（1843年）においては、2・3・4・6という数が韻の基本となって、多重に織りなされている。2は弁証法的特質、3は三位一体、4は人間精神の四つの展開と位相、6は信仰と行いの関係、を示している。より具体的には例えば、2という数は否定的な言葉と肯定的な言葉の対峙によって、6は当該聖書箇所（箇所）の聖句数と講話の段落数によって、韻が構成されている。

第二章『三つの建徳的講話』（1843年）第一節・第二節・第三節： この講話における韻の基本数は3・5・7であり、3は神の愛、5は神の愛に敵対するもの、7は神の愛と敵対者の格闘、を示している。より具体的には例えば、神の愛やその実践が三つの違った言葉で表現されていたり、7つの段落構成で記述全体が構成されたりしているのである。

第三章『四つの建徳的講話』（1843年）第一節・第二節・第三節・第四節： この講話における韻の基本数は、2・3・4・6・8などであり、2は信仰の弁証法的性格、3は旧約聖

書ヨブ記のヨブの言葉や友人、4は信仰における徳目などであり、より具体的には例えば、肯定的な言葉と否定的な言葉が対になっていたり、三つないし四つをひとかたまりとする言葉や登場人物が表現されていたり、これらの一定の表現が繰り返されて六つないし八つの事項がひとかたまりとなって描かれていたりする。また、一つの同じの文章のなかに、2と3といった韻の基本数が重複してあらわれたり、それまでの講話の主題、例えば新約聖書ヤコブ書の主題が折り重なっていたりする。

第四章『二つの建徳的講話』(1844年)第一節・第二節： この講話における韻の基本数は、3・4・6・7であり、信仰の徳目の一つである忍耐についての話が引き続き展開する。3は信仰の内面的基本性格、4は忍耐の内面的特徴、6は忍耐の外面的特徴、7は世界をあらわしている。より具体的には、聖句の言葉の数・段落・同一の言葉の繰り返しなどをおして、韻律がつくられており、文脈全体では7つをひとまとめとする韻律から3つをひとまとめとする韻律への変容が見られる。

第五章『三つの建徳的講話』(1844年)第一節・第二節・第三節： この講話における韻の基本数は主として4であり、この韻律を様々に補強する3・5・7・9といったいわば副韻律が働いている。この講話では信仰が、若さ(第一講話)・期待(第二講話)・信仰の模範である洗礼者ヨハネ(第三講話)の側面から描かれており、より具体的には、聖句の言葉の数・段落・同一の言葉の繰り返しなどをおして韻律がつくられているが、とりわけ信仰の成熟過程が、謙虚さという徳目の四つの段階(罪からの自由・努力・自己否定・和解)や至福という徳目の四つの段階(内なる喜び・イエスの臨在の喜び・分別の喜び・無上の喜び)としてあらわされている。

第六章『四つの建徳的講話』(1844年)第一節・第二節・第三節・第四節： この講話における韻の基本数は主として4・5であり、この韻律を補強するのが3・6である。より具体的には、神を必要とすることが人間の完全性であるという理解のもとで、人間精神の発展過程である四段階(無力・献身・自己との和解・神の臨在の体験)という仕方であらわされており、ひきつづき、苦悩と愛(第二講話)と臆病と決断(第三講話)が5の韻律によって、葛藤と祈り(第四講話)が4の韻律によってあらわされている。これらの韻律に対して、3・6は副韻律として働いている。

第七章「構造と展開」第一節・第二節・第三節・第四節： 本章においては主として、ケルケゴール宗教思想レトリックと詩人バイロンの関係(第一節)、『十八箇の建徳的講話』のレトリック構造を集約した表(第二節)、愛・忍耐・決断・祈りと争いといった主題が『十八箇の建徳的講話』において反復深化する構造と『死に至る病』の比較分析(第三節)、ケルケゴール宗教思想における知性と愛の関係(第四節)が示され、論じられている。ケルケゴールは、青年期に詩人バイロンの四行詩や八行詩に親しみ熟考するこ

とをとおして、ヘーゲル弁証法の三項性（正・反・合）などからヒントを得つつ、思想の基層に韻律を見出し、ケルケゴール独自の表現を獲得した。こうした韻律をとまなう思想表現は『十八箇の建德的講話』におけるリフレインを含む同一の言葉や意味内容の様々な繰り返し表現として結実し、『死に至る病』というテキストにおいてもそうした特質を確認することが可能である。なおケルケゴール宗教思想において知性と愛は、相互補完関係にあり、信仰における愛の働きによって知性は知恵に変容していく。

結論「建德的講話の音楽的效果」： 後藤氏は、ケルケゴール宗教思想の核心部に、たんなる論理性や合理性によっては表出しがたい情動・感情・情緒といった意味の次元や位相にとりわけ着目して、こうした意味次元や位相をケルケゴールは、レトリック言い換えれば音脈・聴覚文法・音の力動性として表現していった、と理解する。『十八箇の建德的講話』をとおしての本学位請求論文におけるレトリック分析は、ケルケゴール著作活動全体の一部を分析したものであるが、ケルケゴール宗教思想の新たな一面を明らかにしている。なお後藤氏は、音脈・聴覚文法・音の力動性などを総合して一言で言い換えて、音楽と呼称しているが、まさに、ケルケゴールの建德的著作の文章はあたかも楽譜であるかのように、音読朗読することが可能であり、デンマークでは実際のところ、ケルケゴール研究にさいして音読や朗読が推奨されている。

3. 論文の特質・価値および評価

本学位請求論文の特質は、繰り返しになるけれども、ケルケゴール宗教思想における核心部のうちにケルケゴール特有のレトリックを見出して、このケルケゴール特有のレトリックをとりわけ、『十八箇の建德的講話』から詳細に分析したものである。また、そこにあらわれる固有のレトリックをケルケゴールの別の著作である『死に至る病』においても見出す試みをおこなうとともに、ケルケゴール特有のレトリック理解や表現ならびにレトリックと思想の関係性を総括するとともに、ケルケゴール特有のレトリックの発端の一つとして、バイロンの詩やヘーゲル弁証法を取り上げ論究し、後藤氏は、本学位請求論文においてレトリックの韻や韻律と数との関係に着目して、論じきっている。

本学位請求論文の価値と評価についてであるが、ケルケゴール研究史上きわめてユニークなものである点で、またそのアプローチは仔細をきわめており、実際のところ、後藤氏とは異なる韻数解釈も可能であろうし、レトリックを韻数とは異なる事象を用いて分析することも可能であろうが、本学位請求論文における後藤氏による解釈と論述は、厳密かつ一貫していて粘り強く執拗な探求をおこなっていて、十分な説得力を持っている点で、その価値は高く、また本学位請求論文に対する評価もきわめて高いものである。

また、ケルケゴールの生前に公開された諸著作や生前には公開されなかった遺稿集のデンマーク語原典を精読し、ドイツ語・英語・日本語などの各種翻訳も参考し、ケルケ

ゴール研究文献やレトリック関連文献ならびに聖書を十分参照し熟読熟考するというまことに地道な時間と労力のかかる研鑽が本学位請求論文執筆の素地にあることは、明かであり、博士学位（甲）を得るのに相応しい研究態度が見て取れ、こうしたまことに真摯な研究態度も併せて、高く評価するものである。

本学位請求論文においては、『十八箇の建德的講話』における韻数や韻律をめぐる分析に重点が置かれ、その背後にある韻数や韻律と宗教思想の本質的關係性についての、さらに原理的論究に対しては抑制的であるが、むしろ、こうした抑制の効いた論究を後藤氏が忍耐強くおこなったことをとおして、キェルケゴール宗教思想におけるレトリックの存在と意義が明らかになっている点なども、十分に評価するものである。

4. 論文審査過程および公聴会

論文審査会過程は、主査中里巧、副査河本英夫・相楽勉により、第1回を2017年11月22日に開催し、それぞれの意見を述べ合い今後の予定を確認して、第2回を12月20日公聴会前に開催しそれぞれの評価を述べ合った後、同日公聴会を開催、第3回を同日公聴会後に引き続き開催し、全員一致で本学博士学位を授与するに相応しいものと判断した。審査過程においては、韻数解釈の複数の可能性・キェルケゴール宗教思想とバイロンの詩とのさらなる研究可能性・哲学宗教思想とレトリックとの関連性などが話題に上ったが、審査過程全体において本学位請求論文は、大変よい印象をもって受け入れられていた。

【審査結果】

以上のように、後藤英樹氏の博士学位請求論文「キェルケゴールの建德的著作の思想—構造と展開—」は、価値の優れたものでありその評価も高い。また、文学研究科（哲学専攻）の博士学位審査基準に照らしても妥当な研究内容であると認められる。従って、所定の試験結果と論文評価に基づき、本審査委員会は全員一致をもって後藤英樹氏の博士学位請求論文は、本学博士学位を授与するに相応しいものと判断する。